

# 繫辞付き焦点構造における派生と関連性

中野晃希

## 1. はじめに

本稿では、日本語の焦点構造における繫辞の詳細な分析と、その統語構造の提案を行う。焦点構造とは、以下の文を指す。

- (1) 太郎がリンゴを食べたのだ (ノダ文)
- (2) 太郎が何かを食べたらしいが、僕は何をだかわからない (間接疑問文縮約、剥ぎ取り文)
- (3) 太郎が食べたのはリンゴをだ (分裂文)

ノダ文では焦点解釈される語が音韻的に強調され、間接疑問文縮約と分裂文では特定の位置に置かれた語が焦点解釈をされる。Hiraiwa and Ishihara (2012) ではこれらの構造に観察される共通点から、(1) のノダ文を基底構造とし、以下のようにそれぞれの焦点構造が派生していると分析している。

- (4) 太郎は花子が何かを買ったと言っていたが、
  - a. ノダ文  
僕は<sub>[FocP [FinP 花子が何を買ったの]だ]</sub>か知らない
  - b. 分裂文  
僕は<sub>[TopP [FinP 花子が t<sub>1</sub> 買ったの]₂-</sub>は <sub>[FocP [何を]₁ t₂ だ]</sub>か知らない
  - c. 間接疑問文縮約 (剥ぎ取り文)  
僕は<sub>[TopP [FinP ~~花子が何を買ったの]₂-~~は</sub> <sub>[FocP [何を]₁ t₂ だ]</sub>か知らない (Hiraiwa and Ishihara 2012)

ノダ文 (4a) が、焦点化と主題化によって (4b) の分裂文になり、主題化により埋め込み節の節頭へ移動した句が省略されることで間接疑問文縮約 (4c) が派生する。この分析によって、日本語の間接疑問文縮約に特有の性質である任意の繫辞や非 WH 句の派生が説明可能になった。

以下では、繫辞の詳細な分析により、新たな焦点構造の提案とその関連性の分析を行う。

## 2. 焦点構造の派生

Hiraiwa and Ishihara (2012) では、繫辞は文法化によって焦点解釈を持った機能範疇 FocP の主要部であると仮定しているが、本節では通常の繫辞文にみられるものと同様、述語位置に存在すると提案する。

繫辞が機能範疇であるとする証拠として、Hiraiwa and Ishihara (2012) では時制の一致の有無を用いている。

- (5) 時制の一致 (Hasegawa 2011, Hiraiwa and Ishihara 2012)
  - a. 昨日太郎が病気{\*だ/だった}
  - b. 昨日太郎が何かを買ったの{だ/だった}

繫辞文であれば (5a) のように時の副詞「昨日」との一致を見せることが観察できるが、ノダ文 (5b) ではその一致が全くみられない。このことから、ノダ文における繫辞は時制よりも高い位置である FocP に生起すると仮定している。しかし、ノダ文の繫辞が IP 内に留まる証拠も以下の様に報告されている。

- (6) a. \*[太郎が来ただろう]そうだ                      b. \*[太郎が来ました]そうだ  
c. \*[太郎が来るね]そうだ                              d. [太郎が来たのだ]そうだ (森山 2021)

補部に IP を選択するモーダルである「そうだ」を用いたテスト (6) では、CP 領域に生起するモーダル (6a)、敬語表現 (6b)、終助詞 (6c) に後続することはできないと観察できるが、ノダ文 (6d) には後続可能であることから、繫辞「だ」は IP 内に生起していると考えられる。そこで、ノダ文の節構造を考える。以下は否定極性表現「しか」を用いたデータである。

- (7) a. [太郎は生肉しか食べなかった]      b. \*太郎は[生肉しか食べたと言]わなかった  
 c. [太郎は生肉しか食べなかったの]だ      d. \*[太郎は生肉しか食べたの]ではない (Terada 1993)

否定極性表現である「しか」は (7a) の様に否定辞「ない」によって節内で束縛されている必要があり、節外からの束縛は (7b) の様に許容されない。(7c, d) ではノダ文にも同様の性質が観察されることから、二重節構造を持つと考えられる。すると、FocP の主要部に繫辞を仮定しなければ説明ができなかった時制の一致に関しても、二重節構造を考えると、以下のように時の副詞の位置によって説明が可能になる。

- (8) a. 昨日[どうも太郎は本を買う{つもりな/?ような}の]{\*だ/だった}  
 b. [(昨日)](昨日) 太郎は何かを買ったの]{だ/だった}

モーダルとその関連要素を節境界に入れた (8a) では、主節と埋め込み節の境界が明示的になっており時制の一致を見せるのに対し、Hiraiwa and Ishihara (2012) のデータであった (8b) では時の副詞「昨日」が主節でも従属節でも解釈可能になり、時制の一致が一見すると無いかのように考えられる。

本節の議論から、焦点構造の基底構造であるノダ文に関しても、繫辞「だ」が述語位置に生起していると提案する。

### 3. 繫辞残留現象

本稿では、焦点構造に生起する繫辞が述語であると仮定し、以下の構造を提案する。

- (9) 僕は<sub>CP</sub> 何を<sub>1</sub> [<sub>VP</sub> [<sub>VP</sub> [<sub>IP</sub> 太郎が<sub>4</sub> 買ったの]<sub>2</sub>] (だ)<sub>2</sub>]か]知らない

まず、埋め込み節内において任意の繫辞の派生が許されるという点から、Hiraiwa and Ishihara (2012) に従ってノダ文を基底構造と考える。その上で、ノダ文から直接間接疑問文縮約が派生していると仮定する (cf. Nakamura 2012)。すると、主題位置のみを省略可能であった分裂文分析とは異なり、焦点要素の抜き出しがない場合でも埋め込み節全体の省略が可能であることを予測するが、実際にその構造は以下の様に可能である。

- (10) A: 太郎がまた宿題を忘れたんだって  
 B: (僕は)太郎がまた宿題を忘れたのだと思っていたよ

本稿では当該構造を繫辞残留現象と呼ぶ。ここで、この構造がノダ文から派生されているとすると、焦点構造であるのかが疑問となるが、以下の様に焦点構造に特有の主節現象 (埋め込み節では非文法的となり主節でのみ許容される現象) が見られることから、繫辞残留現象も焦点構造の一種であると考えられる。

- (11) \*太郎は花子がリンゴを食べたことを否定したが、次郎は[だこと]を否定しなかった

以上の議論から、焦点構造はノダ文を基底生成とし、そこから直接派生していると考えられる。

### 4. まとめ

本稿では、日本語の焦点構造に生起する繫辞の詳細な分析を行い、先行研究で分析された機能範疇ではなく、通常の繫辞文と同様の述語位置に生起していると議論した。さらに、その帰結として、ノダ文を基底構造とした新たな焦点構造とその関連性を提案した。

### 主要参考文献

- Hasegawa, N. 2011. On the cleft construction: Is it simplex or complex? *Scientific Approaches to Language* 10. 13-32. Kanda University of International Studies Center for Language Sciences. / Hiraiwa, K. and S. Ishihara. 2012. Syntactic metamorphosis: Clefts, sluicing, and in-situ focus in Japanese. *Syntax* 15.2. 142-180. / 森山倭成 2021. In-situ focus 文の構造 『JELS 38 (日本英語学会大会プロシーディングス)』. 72-78. 日本英語学会 / Nakamura, M. 2012. Case morphology and island repair. ed. J. Merchant and A. Simpson. *Sluicing: Cross-linguistic perspectives*. 104-122. Oxford University Press, New York. / Terada, M. 1993. Null-expletive subject in Japanese. *Kansas Working Papers in Linguistics* 18. 91-110.